

「授業を繋ぐ！担当教員とのディスカッション」

小島亜華里（総合情報学部 マルチメディア教育論 TA）

「マルチメディア教育論（担当：黒上晴夫教授）」は、総合情報学部の3回生以上を対象とした授業で、約240名が受講しています。この科目では、教育の情報化やブロードバンドが普及する中で、学習の質や教育の質はどのように変わっていくのか、学習者にどのような力が形成されていくのかを考えていきます。受講生は、情報化がすすんだ学習環境における、学習者、教師、コンテンツ開発者、学習管理者の関わりを多角的に検討します。

私は、授業の初めに、前回の授業のリフレクションとして、CEASに書き込まれた受講生のコメントを紹介しています。トピックは「授業内容に関連することを自分で調べてコメントする」というもので、書き込みは平常点として加算されます。授業開始当初、実際に寄せられるコメントは、「今日はどんなビデオを見た」といった授業内容そのものをまとめているだけの意見や、そういった内容に対する感想に留まっていました。ところが、1か月が過ぎた頃、授業でわかったことと調べたこととを合わせたコメントが寄せられるようになり、その上での意見や感想が書かれるなど、受講生のコメントに変化が出てきました。

私は、「授業内容に関連することを自分で調べてコメントする」ことができているコメントを取り上げ、その際、学籍・名前を公開していますが、この名前の公開が、受講生の調べる活動への意欲の向上に繋がっているのではないかと思います。名前の公開については、最初は「恥ずかしい」という受講生の意見もありました。しかし、公開される可能性があるということによって、書き込む情報の信憑性や表現の正確性が意識化されているように感じられます。それは、調べた内容だけでなく、授業内容についても言えることで、きちんと授業を聞いていなければ、コメントが書けないという状況も生み出しています。このことは、本質を捉えていないコメントや授業と関係のないコメントの減少からも見て取ることができます。

また、TAとして、コメントを見ていておもしろいのは、授業の回を重ねるごとに、受講生の意識が変容していくのを感じられることです。授業では、ほぼ毎回、メディアを活用した国内外の授業のビデオを視聴します。そこで紹介される実践をどう捉えるかという視点が、担当者が講義で扱う情報（PC普及率など数値データ、答申や指導要領、実際の教材コンテンツなど）とうまく繋がることで、教育そのものの捉え方も変わってきているように感じます。また、逆にビデオ視聴から、そういった背景へと関心が向けられることもあります。

こういった受講生の意識の変容に、授業の構成が影響していることは明らかでした。そこで、私自身もリフレクションの位置づけをもう一度考え直し、前後の授業内容との関係を考えながらコメントを紹介するようになりました。そのためには、授業で扱う内容について担当者に確認しておく必要があります。授業内容について話を聞く中で、授業内容に関連する受講生の反応や関心を担当者に伝えることもします。このような形で、授業について担当者とディスカッションできることは、受講生の反応を的確に捉えて、授業に反映してほしいという思いに繋がっていると思います。また、そうして構成された授業の反応を、コメントとしてフィードバックされるサイクルが、TA として関わることのおもしろさに繋がっていると思います。担当者の描いている授業のイメージを共有し、受講者に近い立場からディスカッションし、さらに評価として受講生の反応を得られるようなシステムがあることで、担当者と受講生を繋ぐような、TA にしかできない役割を見つけ、その意義を見いだせるのだと思います。

<TA としての工夫！>

掲示板に寄せられたコメントにフィードバックをするとき、前後の授業内容との関係を意識して紹介しています。受講生が週 1 回の断続的な授業を関連づけながら授業に臨むことで、担当者が構成した 13 回の授業の意図が伝わりやすくなると思うからです。そのためには、TA は各授業で扱う教材や講義内容を担当者と共有し、担当者の授業全体の意図を理解しておく必要があります。